

あるいは光と影の魔術師、あるいは奇跡の彫版装と呼ばれ、天才の名を欲しのままにした画家レンブラント。だがスヴェトウラナ・アルパースはそんな神話も後世の捏造として一掃する。レンブラントは黄金時代オランダの商業資本体制のバブルに乗った企業家だったというのが『描写の芸術』の著者の説だ。

まず画家の注文の取り方。材料費の騰価で相場が決まっていた当時において、時間給を要求し、満足する結果が得られないからというので、納品引き伸ばしを繰り返した末に、超過勤務手当を要求する画家の作風は、顧客が値段を上げに音を上げて注文を取り下げるか否かの限界まで快進に続行される。

ふたつ目は工房での共同制作。弟子に描かせた「自分」の肖像画に一枚加えて「自分」の真作と「偽って」売り込む商才の逞しさが、後世の個人主義的眞贋論争をハナからあざ笑う。

そして三つ目が計画破産。レンブラントが破産を宣告されて自分の版画を放出したのは、芸術家の興存

才媛アルパースの偶像破壊

# 企業家レンブラント？ 天才神話の脱構築

# 音引！

稲賀繁美

三頁大牛・フランス文学

的試練でもなんでもなくて、実はそのあとで評価額が上昇することを先刻計算のうで意図的に市場を操作しよう、為になした策略だったというのだ。もう8年も前にポンビドー・センターでこの仮説を講演し、批判を封じた彼女の切り返しが、それは見事だった。無論画家ご本人がどこまで意図していたかは疑問ですけど、歴史的に見れば彼の没後、事態はまさに私の仮説通りに進行したじゃない。これをまさに「天才悪徳女弁護士」？

「天才」創出の裏に隠蔽されてきた経済策略を仮借なく暴露してみせたこの才媛の偶像破壊には、地元オランダの美術史権威筋がほとんど生理的と言ってもよい猛反発を示した。専門家に近いほど悪評紛々で、遠ざかるほど好評というのが、『描写の芸術』以来この亡命子女二世のもっぱらの定評だ。そんな彼女の仕事にフランスで真っ先に注目したのも『芸術の規則』の著者ピエール・ブルデュエーだった。

S. Alpers, *Rembrandt's Enterprise*: Chicago U.P., 1988